

平成 29 年度第 1 回 県と市町村との総合教育懇談会（概要）

日時 平成 29 年 5 月 31 日（水）

13 時から 15 時

場所 県庁議会棟 404・405 号会議室

【知事あいさつ】

- 地域の子どもが地域のすばらしさを知って、県外に出た後に戻ってくることの重要性、県外からの企業誘致、人の誘致も重要。
- これからの長野県を考える上で、教育は最重要政策。
- 県と市町村の役割と責任が複雑に分かれているが、重大事案が発生したときは一緒に対応していかななくてはならない。市町村、市町村教委、知事、県教委が垣根を取り払って忌憚のない意見交換をする中で、一緒の方向性を見出していきたい。

<ICTを活用した教育について>

【長野市】

- 子どもの運動不足、コミュニケーション不足、目の悪さといった問題がある。
- 機器の更新が 5 年ごとで、相当な経費がかかる。県が主導して、覚悟をもってやってほしい。
- 紙からデジタルになることがいいことなのか。集団での活動、人間関係、思いやりが全て ICT と結びついていると、ちゃんと育っていくのか心配。

【須坂市】

- 幼児教育から大学まで通して見た時に、いつ頃どのように ICT に接する場面を作ればいいのか。小さいころは感性を磨く時期。出会わせる時期は大事。
- 一方で、東中学校でモデル校として電子黒板を導入したところ。子どもが劇的に変わった。全国学テでも伸びてきた。ICT と向き合うことで、他の児童との話し合いが生まれた。

【東原教授】

- 不安は必ずあるが、使う主導権は人間にある。その決定の仕方がうまくいくようにすること。何を重要視するかとのバランス。やってみないとわからないので、近場でやってみるべき。
- 懸念はすべての道具によって言えること。行き過ぎないように程度を考えることが必要。
- 将来のことを考えれば、文科省の学習指導要領が ICT 環境が不可欠な方向へと変わったので、よっぽどのことと思って、うまくやる知恵を出していくことが重要。
- 対話的な学びのために、ICT は有効。異なる知恵を出し合って、新たに作り出す方向性。

【青木村】

- 青木小学校が ICT のパイロット校として指定を受けている。情報モラルについて、小 1 から組み込んでいる。
- それぞれ打ち込んだものを一画面に投影し、それぞれが考えていることを見ることができ、対話が生まれる。進めてみると効果がある。パイロット校の取り組みを受けて、長野県とし

て検討してほしい。佐賀県に続いてほしい。

【箕輪町】

- 箕輪町もパイロット校。すべての先生が、どの授業でも、少しずつでも使っていくことが大事。
- すべての先生ができるようにするためには、町で雇っているICT支援員の力が大きい。支援員はPCのプロではなく、授業のプロであるべき。

【長野市】

- 使ってみないとわからない。何が何でも、使って1時間授業をしろということではない。
- 予算の問題はあるが、できるだけ導入をしていく方がよい。

【塩尻市】

- 正解はない。懸念はあるが、現に使わざるを得ない。現実的な使い方を教育していくしかない。

【角田次長】

- 校務支援システムの統一について、全国的な状況は。

【東原教授】

- 長野県は市町村間の格差が大きい。
- 文科省では、統合型校務支援システムの実証事業を開始している。学習系と校務系を独立したうえでうまく組み合わせる実証。その事業に手を挙げるのが一つ。
- もしくは、研究結果を待ったうえで、すぐに動けるように連絡調整をしていく。

【知事】

- 経費的な面は。

【東原教授】

- 各教室に備え付けの大型提示装置が必要。数の原理で安く導入する。タブレット40台も3クラスに1セット。その他に校内無線ネットワーク。

【原山教育長】

- 県と市町村が共同して検討組織を立ち上げる、という提案をしたい。共同調達の面でも、学びの内容についても検討を進めていきたい。

※了承

【知事】

- ぜひ進めてほしい。財源をどうするか。コスト削減をどうするか、わかる人間と一緒に入ってやってほしい。

【原山教育長】

○信大の先生も入ってもらって、最適な環境整備の進め方、財源の確保について検討したい。

〈中山間地域における学びについて〉

【長和町】

○2つの中学校（依田窪南部中と和田中）を統合した。30年以上前からあった話だが、住民の反対が多数だった。教委や行政が話し合いをし、時間をかけ、平成26年には8割が統合に賛成になった。

○それぞれの中学校の特色があり、和田中では、コミュニティスクールの中でアントレ学習を行い、地域について勉強していたので、統合後も引き継ごうとしている。二つの学校が一つになっても、違和感なく運営していくためには、それぞれの学校の良さを引き継いでいくことが必要。

【長野市】

○中山間地域の住民でも、自分の子は外に出ていく。でも学校は残したい、と考えている。矛盾がある。中山間地域の学校の特色を作らないと。

○学校の枠組みを今までのようには考えられない。もっと柔軟に考えられないか、検討委員会を設置したところ。

○段階に応じて、学校は個人ではなく、集団で学ぶ環境にしないといけないのでは。小さなところでも学びの質を保障できるようにしていけるよう、計画の中で示していただければ。

【原山教育長】

○少人数の中で、どのように多様性を確保するか。ICTを活用することが重要な視点になってくる。

【東原教授】

○喬木第二小の例。小規模校と中規模校をICTでつないで合同授業をやっている。人数の少ない学校ほど効果を感じている。子どもたちのアンケートでは、自分たちのクラスだけでは出ない意見が出てくる、端的な説明ができるようになる、など。

○すべてICTがいい、というわけではなく、小規模校が抱える課題をいくばくかは解決できるという結果が出てきている。

【塩尻市】

○中学3年生がICTを使ってニュージーランドとつないでいる。いい意味でショックを与える。

【長野市】

○学び、学習という観点ではICTは有効だが、部活など集団で行う活動は難しい。

【長和町】

○近隣市町村と合同で大会に出たりすることで解決していくのでは。

【佐久市】

- 佐久市でも統合事例がある。住民に対しては、丁寧な説明と時間が必要。小学校の規模は、適正規模を考えることが必要。それを補完する方法としてICTがある。
- 学校の魅力づくりをする中で、伝統的に地域で盛んな競技等に期待する向きがある。その一方で人事は部活動とは無関係に行われる。指導者によって大きく左右される。
- 地域の特色を出したい、というときに部活動を人事的配慮の一端に挙げて頂きたい。
- 小規模校は部活動の数も絞られる。

【原山教育長】

- 部活動は教員の多忙化ともつながる。部活動のあり方についても考えていく必要がある。
- 学校主体か、主体を地域に移すのか考えていく必要がある。
- 部活で得る成長体験の保障も大切だが、授業をどうするか、人事ではまず考えなくてはならない。

【知事】

- 計画のゴール4、「クリエイティブビレッジ」という言葉もあるが、町の活性化も必要だが、平行して中山間地域をどう活性化するか考えなくてはならない。
- 中山間地域だから遅れているのではなく、中山間地域だからこそ教育が進んでいる、という方向にできないかと考えている。
- 学校間でできること、できないことの差は何とか担保しなくてはならない。特色を出せるところは特色を出していく。遠隔授業など。
- 「学びの場が中山間地域の核になっている」というアンケート結果は一定程度尊重しなくてはならないが、財政負担の効率性等を考えると、統合ということとのバランスが必要。
- 地域の実態は違うが、ある程度大きな方向性は共有していかななくてはならない。